

「簡単な価値形態」の論理 (その1)

川崎 誠

はじめに

本稿は先に発表した拙稿「『商品の二要因』論の論理」(本月報 475 号所収 [2003.1]) および「『労働の二重性』論の論理」(同 483 号所収 [2003.9])^(注) に続く稿として、『資本論』商品章第三節「価値形態または交換価値」の「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」について、ただし紙幅の都合で「1 価値表現の両極」および「2 相対的価値形態」に限り、その論理の展開を辿るものである。「3 等価形態」と「4 簡単な価値形態の全体」については「その2」に回し、さらに「B 全体的な、または展開された価値形態」以下の諸形態については稿を改めて論じたい。

使用した『資本論』の邦訳テキストは、新日本出版社刊『資本論』(全 13 分冊。資本論翻訳委員会訳) の第一分冊である。また参照する『大論理学』の頁数は岩波全集版(全四巻、武市健人訳) のそれである - 以下では上巻の一を、 同二を、 中巻を、 下巻を と略記する - 。『大論理学』について

目 次

はじめに	1
A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態	2
1 価値表現の両極 - 相対的価値形態と等価形態	2
2 相対的価値形態	9
a 相対的価値形態の内実	9
b 相対的価値形態の量的規定性	23
編集後記	30

(注) これらの稿に含まれる読み誤りについては、時宜を得て修正を施すつもりである。